

理事長挨拶

理事長 中野 卓也

平素より、当法人の活動に対して温かいご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

令和6年は、1月1日に発生した能登半島地震により石川県を中心に甚大な被害を受けました。被災地域の復興は遅れており、住み慣れた地域から離れざる負えない方も多くいると聞きます。今まで築き上げてきた地域の復興が逸早く進むことを切に願います。

そのような災害に対する復興には国の力が必要ですが、昨年は政治も大きく動きました。政治資金不正問題が発覚し、岸田首相が辞任して石破氏が首相に就任しました。石破首相は就任直後に衆議院を解散して、総選挙を実施しましたが大敗を喫し、少数与党として政権維持を強いられることになりました。一方、野党が台頭したことでにより国会内での議論は活発になり、野党提案の政策が審議事項として挙がるようになりました。議論の結果が国民生活の安定に繋がるようになれば政治に対する不信感も変わってくるのではないかと感じています。

障がい福祉分野については、3年に一度の報酬改定がありました。全体的な印象としては、報酬及び減算の細分化、明確な実績に基づく報酬体系となったことです。現場としては様々な実績を今まで以上に記録し、その根拠に基づき請求していくことになるのではないかと感じています。また、処遇改善加算の見直し、物価高騰対策、障がい福祉現場の業務効率化対策等、様々な改定がなされました。これらに対応していくために当会としても会員事業所に資する研修等を実施していければと思います。

さて、新型コロナウイルス感染症が5類に移行して、社会活動が

以前に戻りつつある中、今年度の作業所学会は、6年ぶりに集合研修として開催させていただきました。久しぶりにお会いする方も多く、とても嬉しい気持ちになりました。

今回の研修会は、記念講演を大阪大学人間科学研究科 教授 村上靖彦氏に依頼し、『傷つきやすさと傷つけやすさからケアを考える』をテーマに講演していただきました。フィールドワークの経験からケアを見つめてこられたこと等を講演していただき、普段現場で携わることが多い参加者はとても共感を得たのではないかと思います。

午後の分科会では、意思決定支援、就労支援、地域生活支援の各分科会に分かれて、実践報告等を基に意見交換が行われました。どの分科会も活発な意見交換がなされました。全体ディスカッションでは、分科会報告、午前中の講演を含めての意見交換・討論が行われました。登壇者や参加者の中から多くの意見交換がなされました。全体を通じてお互いに学びあう機会を作ることが大切であり、学んだことを実践に活かしていくことが、研修の成果であると改めて実感しました。

最後に作業所学会要旨の中に「人が人を支え、人格ある人と人に向かい合うという場が福祉の現場です。そこは様々な物語が紡がれるとても豊かな世界ですが、折り合いのつかない『ゆらぎ』（矛盾や葛藤）を抱えることも多々経験します。これらは決して、単なるサービスの提供と消費では得られないことであり、まさに『作業所』の醍醐味と言えます。」という一文があります。この部分が重要であり、研修の中で議論されることではないかと思えます。答えが必ずその場で導き出せるものではないかもしれませんが、このような議論を継続していく、現場の質を上げていくことが豊かな福祉現場に繋がるのではないかと思います。

今回の研修が皆様のこれからの活動における一助となることを心から願っております。